

薩摩硫黄島の境界性と『平家物語』

野 中 哲 照

一 はじめに — 交易論と境界論と —

離島が貧しくて不便だというのは、先入観、偏見という名の、近代日本人の一種の病弊である。ハワイもフィジーも離島ではないか。鹿児島の南に浮かぶトカラ列島（十島村）は、種子島、奄美大島のような大きな島でないぶん、なお貧しさの印象は強いと思われる。不便であることは昔も今も変わらないだろうが、貧しいという点については認識の変革を求めざるをえない。『十島村文化財調査報告書 第二集』によって知られる一九世紀半ばの中之島の状況や、『拾島状況録』（昭和十四年）の語るトカラ列島の状況をみると、たしかに離島は生き延びることさえ困難と思えるほどの厳しい環境とみえる。ところがその印象は、近世初期まで遡ると違ったものになる。

西鶴の『好色五人女』巻五「恋の山源五兵衛物語」（一六八六刊）や『西鶴織留』巻二第二話「国にひろがる一巻の唐織」（一六九四刊）によれば、十七世紀後半の鹿児島城下には、生涯散財しても使いき

れないほどの財があふれていると評される商家がいくつもあった。一六〇九年の島津氏による琉球侵攻後、徳川幕府の鎖国政策が厳格化するまでの数十年間、鹿児島城下は琉球を中継基地とする中国や南方との交易によってかなり潤っていたようである。文学のテクストゆえの誇張は差し引いて受け止めねばなるまいが、上方や江戸の人間が鹿児島に対してその豊かさゆえに羨望の眼差しをもっていたことは確からしい。鹿児島市立長田中学校の敷地内には琉球館跡の碑があり、同市の磯街道には琉球船が入港の目印にしたとされる琉球松が生えている。鹿児島城下と琉球との交易がさかんであったとすれば、その経路にあたるトカラ列島も自然、豊かであったと考えられる。当時の船舶事情や航海技術からして、トカラ列島を経由しない直行の琉球行きなど考えられないからである。その、島津氏による琉球侵攻について記した『市来孫兵衛琉球征伐日記』には、トカラ列島を頼りにしつつ島津軍が琉球に辿り付いたさまがよく記し

キーワード：平家物語、硫黄島、境界性、辺境

残されている。

寛永九年(一六三二)六月二日付で島津藩の家老が琉球在番奉行に送った書状(「十島村誌」所収)に、

七島衆、唐への商売の仕様、一円に沙汰なく、不審慎重に候事。とあるように、史料的にも「七島衆」が中国と交易していたことを裏付けることができ、島津藩が借金を申し出るほど裕福な者もいたということがある。また、寛永十六年(一六三九)に樺山久高(島津藩の家老)が発した掟によると、藩用諸船の船頭・水手あるいは「七島者」が琉球において家を持って逗留することが禁制となっていた。ということとは、このころまで琉球に家を持つ「七島者」がいたということである。

徳之島のカムイヤキ土器(十一世紀後半～十四世紀前半)がトカラ列島を含む南九州から石垣島までの地域に分布していたり、あるいは同系統の平家落人伝承が三島村の硫黄島、屋久島、口之島、中之島、臥蛇島、平島、宝島、小宝島にみられたり、ホゼ(ボゼ)と呼ばれる仮面神の祭りが硫黄島、中之島、悪石島にみられたりするなど、三島村と十島村との境界線を無化するほどの共通性がたしかにある。さらに近年、奄美の喜界島で発見された城久遺跡(くらく)の存在を根拠として、大宰府と奄美群島との交易を推測する論も出始めている。

そのように交易の実態を重視すればするほど、国家の境界意識という観点が軽視されてゆく。境界とは、中央と辺境の関係において画定されるものである。律令制であれ守護地頭制であれ、あるいは

検地、刀狩、禁教令、学校令などの制度や法をどの範囲までゆきわたらせるかという領域意識は国家建設には必須の認識であり、国家を考える際にはないがしろにできないものである。近年の境界論・辺境論は、考古学の成果などによる交易の実体に引きずられすぎで、境界性を無化しすぎてきたのではないだろうか。交流・交易の論(実体論)と、境界論(認識論、制度論)との、どちらか一方が誤っているというわけではない。厳然と峻別しておく必要があるのだ。

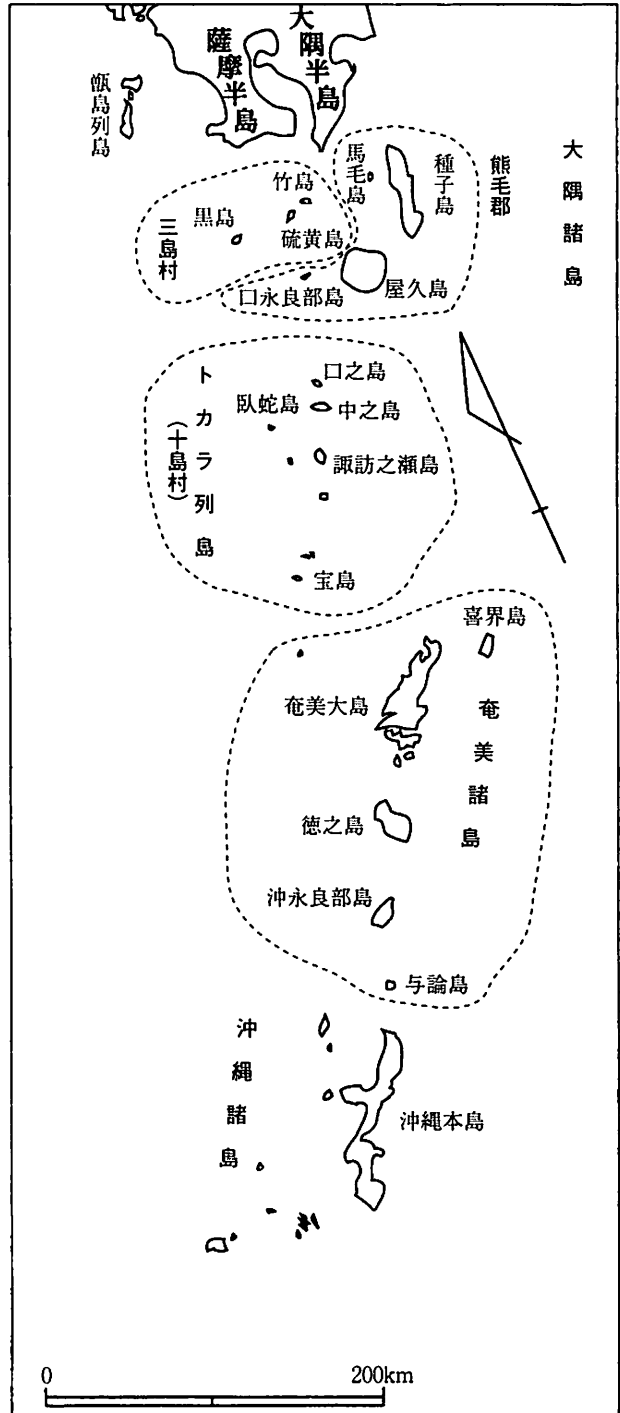
いま例にあげたトカラ列島や奄美群島は、古代や中世において、日本の内側なのか外側なのか、境界線を引くことができるとすればどのラインなのか、それはきわめて重要な問題だ。これを明らかにし、「平家物語」の読解に役立てるのが、小稿の目的である。

二 薩南諸島の概要と問題点

薩南諸島の北部(奄美諸島を除くという意味)は、現在三つの行政区に括られている(図1)。第一に熊毛郡(種子島・馬毛島・屋久島・口永良部島)、第二に鹿児島郡三島村(竹島・硫黄島・黒島)、第三に鹿児島郡十島村(トカラ列島)である。空気が澄んでいる日には、薩摩半島南岸から硫黄島の、その噴煙までも望むことができる。左右に屋久島、竹島・黒島も見える。大隅半島南岸からは種子島が大きく見える。しかし、トカラ列島は、薩摩半島や大隅半島からまず見えない。

知られているように、奄美の島々は十五世紀に次々と琉球王国に組み込まれていったが、それ以前は各島々に島之主がいて、独立性を保っていた。永山修一（二〇〇七）は、「金沢文庫蔵日本図」（原図は一三世紀後半に制作）で、取り巻く竜の外側にアミミが位置していることを根拠に、鎌倉幕府中枢から「アミミは明らかに日本の外と認識されていた」と述べている。このように、いくらこの地域と日本本土の交易が盛んであったとしても、それは境界論とは別のもので、奄美や琉球は、古代・中世においては日本の内側と認める

ことはできない。また一方で、種子島・屋久島は、古くから日本の内側と認識されていた。大宝二年（七〇二年）、多櫛国が設置された（屋久島を含めて）。この時、駅制も大隅国から種子島まで延伸されたと考えられている。現地種子島から見て、目の前に大隅半島が大きく横たわって見える。そのような現地の感覚からしてみても、種子島・屋久島を大隅国の側と認識するのは自然なことであつたらう。それから約一二〇年後の天長元年（八二四）、多櫛国が停廃され、大



南九州から沖縄までの地図

図1

隅国に編入されることになった。種子島の経営(墾田の進捗と制度の布置)が順調にいったということなのだろう(こう考えなければ、のちの肥後氏・種子島氏の入部へと繋がらない)。永山修一(二〇〇二)の推定によれば、この停廃に伴って駅路が廃止されたとしても、伝路として残されたという。そして、平安後期の十二世紀後半、多敷島が大隅国から薩摩国の管轄下に移された。永山は肥後から薩摩へと直接南下する陸路の実態も明らかにしているし、大宰府から薩摩まで船を利用した「天平八年薩麻国正税帳」の例を紹介してもいる。たしかに、野口実(一九九五)が紹介する薩摩と肥前の密接な繋がりを、上村孝二(一九五九)が指摘する薩摩と肥前の言語の近さを知ると——肥後と薩摩との間に横たわる球磨山塊が越え難いためか——肥前と薩摩との海運は古くから発達していたようにみえる。肥後を飛ばして肥前と薩摩が近い関係を示しているとしたら、肥前のすぐそばの大宰府を想起せざるをえない。大宰府中心の世界観からすると薩摩を南九州の拠点として、そこから種子島などを掌握するのが実態に叶っているという発想が生まれたのだろう。このような歴史的経緯をたどってみても、種子島・屋久島(加えて馬毛島・口永良部島)が古代から日本の内側に属するものとして認識されていたことは疑いようがない。

種子島や屋久島と同様に、三島村の三つの島(竹島・硫黄島・黒島)も薩摩半島から目視することができ、しかも薩摩半島寄りなので、もともと政治的な管轄意識としては古くから薩摩国に属していたのではないかと考えられる。それが、例の「薩摩方硫黄島」の表

現の意味するところではないだろうか(後述)。

こうして日本国への帰属という観点から問題点を絞ってみると、トカラ列島すなわち十島村(口之島、中之島、臥蛇島、小臥蛇島、平島、諏訪之瀬島、悪石島、小島、宝島、小宝島、上ノ根島、横当島)の帰属が、古代・中世においてどうであったかが焦点に据えられるべきことがわかる。この問題は、古代・中世の中央側の日本人の境界認識に関わる問題となるはずであるし、「平家物語」において康頼・成経・俊寛が流罪にされた島が硫黄島であることの意味も明らかにすることになるはずである。

三 端五島・奥七島の区分意識と黒潮

現在の三島村、十島村あたりのどこで線引きする意識を古代の日本人は持っていたのか、それを探る糸口となるのが、延慶本「平家物語」の次の記述である。

端五島くまごしま 奥七島おくななしまトテ、島ノ数十二アムナル内、端五島ハ昔ヨリ日本ニ随フ島ナリ。奥七島ト申ハ、未ダ此土ノ人ノ渡タル事ナシ。

このテキストは延慶二年(一三〇九)に書写された本の転写本だが、そこに描かれた俊寛らの物語は平安末期(一一七七―七九)のものである。そしてそこには、島人の語る古伝も紹介されている。問題はその史料的价值である。その古伝には、硫黄島の稲村岳信仰について語られているのだが、それは「魏志倭

人伝」以前にまで遡るようだ（別稿）。しかも、現地硫黄島の地勢と合致する事象が次々と明らかになっている（別稿）。文献資料以上に確実な地理上の裏付けにより、延慶本『平家物語』の語る硫黄島周辺の地理および地理感覚が、古代にまで遡及しうるものと考えられるのである。

そこで傍線部のように、延慶本『平家物語』では、古来より「端五島」は日本に帰属していると明言している。「端五島」はほぼ現在の三島村に相当し（諸説あり。詳細は次節）、「奥七島」がトカラ列島（十島村）を指すことには異論がない。トカラ列島へは「未ダ此土ノ人ノ渡タル事ナシ」というのは誇張だろう。なぜならば、先述のように考古学的成果が交流・交易の実態を物語っているからだ。ただし、この場合の「渡る」が移住するというようなニュアンスであるとすれば、たしかに竹島・硫黄島・黒島の間が気安くトカラ列島に移住できるような親近感を持てる関係ではなかった。

時代はずいぶん下るが、『屋久町郷土誌』第二巻 村落誌 中（一九九五）の「麦生村落誌」に、「七島流れ」という海難事故のことが記されている。「遭難の年月日は不明であるが」という書き出しだが、明治四十三年（一九一〇）に沈没した船が現役として操業していた時期のことなので、明治期の事故であることは間違いない。屋久島の麦生から出港した「新茶船」が、天候の急変により七島周辺で音信不通になった。数日後に屋久島に戻ってきたときには釣ったカツオがすべて七島の人たちに取り上げられていたという。それ以来、子どもを脅すときに「シットガシマニヤツド（七島が島

に遭るぞ）」「オニのシットガシマ（鬼の七島が島）」（に遭るぞ）などと言うようになったとのことである。もともと、同じ屋久島でも粟生から出港した漁船が「七島を基地にしている地理にも詳しくかつた」ということなので、屋久島と七島との間に深い断絶があったと考ええるべきではない。しかし一方で、明治二十八年（一八九五）七月二十四日に枕崎の漁船が黒島沖で遭難した「黒島流れ」という海難事故（四一人が死亡）——黒島の人々が献身的に遭難者の救助に当たったと伝えられていて、その時の恩を謝して現在でも枕崎と黒島の中学生の交流が続いている——と比べてみると、屋久島と七島との間には、信頼関係のようなものが感じられない。信頼関係というと歴史的事実の認定としては曖昧なものを持ち出しているように見えるかもしれないが、要は、共同体の内側と認識しているかそうでないか、ということである。

生物学的には、このあたりに渡瀬ラインの問題もある。正確には、悪石島と宝島との間のラインだが、トカラ列島が本土との異質性を含む地域であることを示すものであることは間違いない。また、山田尚二（一九九五）によれば、いわゆるサツマイモ（近世になってから伝来）のことを薩摩・大隅から種子島・屋久島・竹島・硫黄島・黒島まではカライモと呼ぶのに対してトカラ列島ではハンスとかハントと呼んだそうである（ちなみに琉球ではウム）。文化的にも、異質ということだ。さらに、中村伸一（一九七〇）も、

村制施行以前は下七島、宝七島、川辺七島とかよばれていたように、上三島（黒島、竹島、硫黄島）とは地理上の距離からも

別個の生活圏を形成していたものと思われる。七島灘、七島正月、七島ゴサ、七島節など七島の名のつくことばが残っているのは上三島と別個の生活圏を形成していたことを物語っている。

と指摘している。「十島村誌」第四章「近世のトカラ」によれば、「三島の島役」を「庄屋・横目・浦役」とするのに対して、「十島の島役」は「郡司・横目・浦役・名頭」と制度まで違っていた。

このように、たしかに種子島・屋久島・三島村とトカラ列島(十島村)との間には、文化的・制度的な異質性や現地の人々の認識上の断絶感が窺えるようである。⁽⁵⁾

* * *

じつは、三島村と十島村との間にある断絶感は、潮の流れが影響しているらしい。「三國名勝図会」にこの海域特有の「落漕らくそう」についての記述がある。

薩摩地方より南島琉球へ往来するには、必ず七島海を過ぐ。七島海とは、屋久島より大島までの中間をいふ。七島其中間にある故なり。北海東西七十里許の間、波浪殊に高く、潮水常に東に注ぎ、迅速なること急流の如し。屋久島と口島との間は、特に迅速にして、その勢甚壮なり。往来の舟船、其順風の時は、急流を過ぎ得るといへども、風なき時は、必ず急流の為に東に落ること数十里にして、後止むといふ。是を七島灘と号して、

舟人恐怖せざるはなし。琉球往来第一危険の処とす。唐土の書籍、此海潮東流危険の状を載せて、落漕と名づく。

西から東への「迅速」な潮の流れがあり、「七島灘」と呼ばれる難所で、「舟人恐怖」の海域であるという。しかも重要なのは、もともと流れが急なのが、屋久島と口之島の間であると明言していることである。これはまさに、三島村と十島村との間の文化的な境界意識と合致するものだ。ここにいう「唐土の書籍」が「元史」であることは、次の「七島問答」によってわかる。

「七島問答」は、明治十七年の頃、鹿児島県令渡辺千秋の命に従った白野夏雲(鹿児島県職員)が「七島」(トカラ列島)を実地踏査した記録である。まず、「七島何ノ故ニ専ラ総称セラルルカ」(なぜ「七島」で一括するのか)の問いに対して、次のように答えている。

海潮ノ西、支那海ヨリ落ツルモノ爰ニ至リ、大ニ激シ。更ニ非常ノ東流ヲ促スニ至レリ。南島誌ニ云フ「七島其海潮常ニ東ニ向ツテ落ツ。乃チ是「元史」謂フ所(ノ)落漕趨リ下ツテ回ラサルモノ也トアルガ如ク、中古来薩摩商船ノ沖繩ニ航スルモノ最モ此際ノ危険ヲ謹メリ。

また、「落際ノ実況如何」の問いに対しては、次のように答えている。

其満潮ニ至ツテハ甚ダ恐ルベキノ景況ヲ見ス。只其落潮ニ際シ東流ノ勢力宛モ大河ノ奔流スルガ如ク、張声轟然トシテ其響キ遠キニ達シ、イカナル老手ノ舵子アリト雖モ布帆船ノ決シテ之ニ廻ルヲ得ベカラズ。

『七島問答』の筆者は、『三国名勝図会』の記述を知らなかったようである。なぜならば、『三国名勝図会』ではこの急流を「迅速」と表現しているのに対して、『七島問答』では「落ツル」ないしは「大河ノ奔流スルガ如ク」と異なる表現を用いているからである。直接の引用関係がない二書が、別々の立場から期せずして同様の表現をしていることから、三島村と十島村との間の急流の存在が、客観的なものであったのだろうと推定できる。

『七島問答』はさらに「七島渡海ノ期節イカン」と続け、これに対する答えは、

夏季ノ間ハ大抵海平穩ニシテ渡航スベキ日和アリ。只恐ルベキハ秋末ヨリ冬季ノ間トス。之ヲ概スレバ、一年ニシテ其半年ハ全ク渡航ヲ絶スベシ。

と、一年のうち半年ほどしかこの海域では船を動かさないと述べている。

このことを裏付けるのが、現代の海流図である。図2のように、南から北上してきた黒潮が「七島」（十島村）の最北の口之島を起点にピボットするように急に向きを変え、東流している。まさに『三国名勝図会』のいう屋久島と口之島との間を流れているのである。そして、先に引用した傍線部の上に「北海、東西七十里許の間」として急流であるとする表現があることに気づく。この「北海」とは「七島」の北の海すなわち口之島の北側を指すのだということがわかる。たしかにその海域で「東西七十里許」（約二八〇キロメートル）にわたって黒潮が東流している。近代的な海流図や黒潮の知

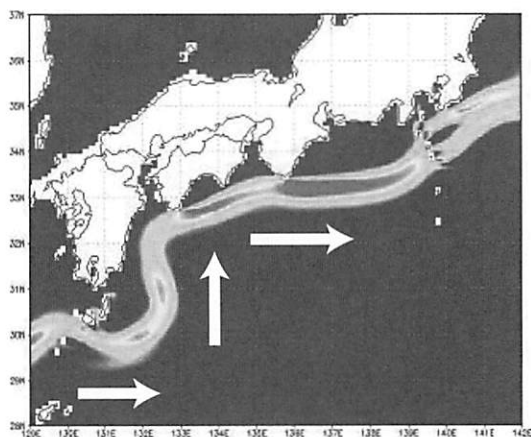


図2

出典：<http://www.ecool.jp/news/2011/11/toshiba11-ocean1419.html>（東芝の海流発電のHPより）
ただし、図中の白ヌキ矢印は、私に付したもの。

識のない時代に、現地の人々の地理感覚で記された記録と、この海流図が見事に符合するのである。そしてさらに、文化的・制度的な異質性や延慶本『平家物語』の境界線の意識まで、一本の線で繋がってくる。延慶本『平家物語』の、「端五島ハ昔ヨリ日本ニ随フ島ナリ。奥七島ト申ハ、未ダ此土ノ人ノ渡タル事ナシ」という表現が、あながち根拠のないものではなかったということである。

四 端五島はどこか — 黒島の異質性 —

トカラ列島すなわち「奥七島」が「昔ヨリ」日本国外と認識されていたことを、文献資料や海流図で裏づけた。次なる問題は、「端五島」はどこか、である。

延慶本『平家物語』にみえる「端五島」は「くち五島」とも表記され（長門本）、その中に硫黄島が含まれることは間違いない。するとそれに伴って竹島や黒島も「端五島」に含まれる（これが現三島村）と考えるのが自然だというのが従来の説で、残りの二島がどれであるかを議論するという方向で研究が進んできている。代表的なのは次の二説である。

A 説：硫黄島・黒島・竹島＋口永良部島・屋久島

〔永山修一（一九九三）〕

B 説：硫黄島・黒島・竹島＋草垣島・宇治島

〔村井章介（一九九七）〕

どちらも三島村の三つの島を含むという点で共通していて、残りの二島で考えが分かれている。ところが、『種子島家譜』によると、残念ながらどちらの説も違うようである。

『種子島家譜』の初代信基の条（寿永二年の記事に続く）に、次のような記述がある。

且つ時政、執奏を以て、多祢島、屋久島、永良部島、硫黄島、竹島、七島、凡そ十二島を賜ふ。

注目すべき点は、「端五島」に種子島・屋久島が含まれているこ

とである。ということは、「端五島」「奥七島」の「端」「奥」という認識は、薩摩国や大隅国に視座を置いて見た場合の呼称ということになる。かりに種子島に視座を置けば、自らの島を「端」とは呼ばない。だから、種子島に視座を置く右の『種子島家譜』では「端五島」という総称はせず、個別に島々の名を挙げたのである。ただそこに、「端五島」という総称が用いられていないだけであつて、この五つの島々を一つのグループだとする認識を、『種子島家譜』が受け継いだのだ。

さて、この海域に「七島」という固有名詞をもつ島はないので、この「七島」はトカラ列島（十島村）を指すのだろう。『種子島家譜』や周辺史料にもトカラ列島を指す「七島」が頻出する。すると、傍線部の「多祢島、屋久島、永良部島、硫黄島、竹島」で五島である」と読める。下文に「凡そ十二島」とあるので、これは傍線部の五島と総称としての「七島」とを足したものだとして理解してよい。ここで問題になるのは、「端五島」は個別の島の名で呼び、「奥七島」が総称でしか呼ばれていないが、そういうことがありうるのか、である。

九州本土に近い「端五島」は目視もでき、交通も頻繁であったのだろうから、それぞれの島々の名を個別に呼称する意識が生まれる。それに対して「奥七島」は薩摩半島南端からでも直接は見ることができない。しかも「端五島」と「奥七島」の間には海流という障壁があるのだから、「奥七島」が抽象化するのには、当然だろう。

「端五島」を個別に呼称し、「奥七島」を総称で呼ぶことについては、類例がある。『十島村誌』第四章「近世のトカラ」によれば、

文政五年（一八二二）に調査された蔵入高の記載について、九州本土に近い島々については「黒島・硫黄島・竹島 一〇二石」と個別の島の名を挙げて記す一方で（これは近世の記録なので黒島が含まれている）、トカラ列島については、「七島 八三一石」と一括して記載している。また、天明三年（一七八三）四月に「主馬」なる人物が書いた文書（『十島村誌』六六二頁）には次のようにある。

七島並びに硫黄島・竹島・黒島横目の儀も、勉め内書き下し名
字御免下されたま旨、御船奉行申し出の趣これあり。（以下も
「七島の儀」と「硫黄島・竹島・黒島の儀」と書き分ける。）

このように九州本土に近い島々は固有名詞でそれぞれ呼び、トカラ列島については「七島」と総称することがありえたようである。

* * *

さて、「種子島家譜」の記述に戻る。この記述の最大の問題点は、黒島を「端五島」の中に入れていないことだろう。先に紹介したA説、B説ともに竹島・硫黄島・黒島の現三島村を含んで「端五島」を考定している。「端五島」から黒島を除外することに妥当性があるのか、あるいはたんなる記述漏れなのか。

ここで注目すべきは、『三島村誌』第三章「中世の三島」の第二節「千竈氏黒嶋郡司となる」の解説である（松永守道の原稿を森田慶信が加筆修正）。それによると、『地誌備考』建武元年（一三三四）六月二十六日の文書に、島津氏がその配下の千竈六郎左右衛門（入

道円覚）を黒島の郡司に任じた一件がある。これ以前の黒島はどこにも帰属せず、在地の日高氏による自治の状態であったという。もちろん朝廷も島津氏もこれを認めてはおらず、名目上の管轄と現地の実態がずれていたということだろう。この文書の意義は、竹島や硫黄島とセットではなく、黒島を単独で与える（といっても帰属を表明していない島に入って平定せよとの意味を込めた、いわゆる「切り取り次第」という意識を見せていることだ。これについて『三島村誌』は、「なお、竹島、硫黄島は鎌倉初期以来、種子島を領した種子島氏初代信基の領地として時の執政北条時政から与えられている」と述べている。『種子島家譜』の記述を踏まえてこの建武二年文書との整合性も勘案した、妥当な見解だろう。

これに続いて『三島村誌』は、「応永十九年（一四二二）には、島津家八代太守久豊（義天公）は、種子島家七代清時に、竹島、硫黄島、黒島を与えている（野中注…この根拠は『種子島家譜』だろう）ので、この頃には黒島も千竈氏の手から離れていたものであろう」と述べている。この応永十九年が、竹島・硫黄島・黒島の三つの島をセットにする意識の始まりということになる。

『種子島家譜』を点検してみると、その中で硫黄島、竹島、黒島の三島をセットにして「三島」の表現が出るのは、たしかに八代清時の条の「太守久豊公、硫黄、竹島、黒島三島を加へ与ふ」が初めである。それまで大隅→種子島→屋久島→口永良部島→硫黄島→竹島だったルートにこの時期黒島が加えられるようになったのは、日明貿易興隆（ちょうど一五世紀初頭から開始とされる）の影響で造



図3

出典：ちくま文庫版『柳田國男全集 I』
(筑摩書房, 1989)



図4

出典：<http://plaza.rakuten.co.jp/mimitomi/diary/20110403000/>

船技術が飛躍的に進歩したからではないだろうか。時代は約一世紀下の史料だが、『種子島家譜』忠時の条によれば、永正十七年(一五二〇)、渡唐船を造る話が足利將軍家から種子島家に舞い込んでいる。種子島家が外洋航海に耐えうる大型船を造る技術を有していた明徴だろう。明まで渡れるような大型船ならば、黒潮の逆流に負けずに黒島まで渡れるようになったと考えても不自然ではない。

さて、黒島が竹島・硫黄島から外れるのも、潮流の影響だろう。先述のように屋久島と口之島の間には激流とも言われる黒潮が西から東へと流れている。先に挙げた海流図は、端五島と奥七島との断絶感をいうために簡明で見やすい図を掲げたのであるが、当然のことながら実際の海流には本流から枝分かれしてゆく分流がある。そういう細かいところまで描いた海流図(図3・図4)によると、中之島あたりを西から東へと通過する黒潮から、北に枝分かれする

潮流を描き込んでいる。これが、黒島から硫黄島方向への潮流となる。硫黄島方面から黒島に向かおうとすると向かい潮(逆流)になるということである。ただでさえ距離の長い硫黄島―黒島間であるのに、このように潮に逆らって向かわねばならないので、動力船のない時代にあつては硫黄島から黒島へはよほど気象条件の良い時にしか渡れないという感覚があつただろう。

これについて、村宮船みしま(フェリーみしま)の徳田繁人一等航海士に話を伺うことができた(二〇一二年九月)。やはり、硫黄島から黒島へ向かう時(約六五分)の方が、黒島から硫黄島に来る時(約五五分)よりも、時間がかかるということだった。しかも、黒島に向かう時は左前方からの潮に押されるので、オートパイロット(自動航行)にしても左へ左へと二、二度ずつ手動で修正するとのことである。季節による潮流の強弱変化はないが、大潮の日にはこの潮流がとて強くなるという。

五 種子島視座の重要性 ―前近代の航路の復元―

竹島・硫黄島・黒島という現在の三島村はもととセットではなく、黒島は別であったと指摘するためには、種子島に拠点を置いて当時の交通路が成り立っていたということをもう少し補強する必要があるだろう。前節では薩摩・大隅に視座を置いて「端五島」という認識が生まれたのだらうと述べたが、今度はその「端五島」の拠点である種子島に視座を置き直してみる必要があるということだ。

【種子島家譜】には、屋久島に関することに伴って、口永良部島の記事も散見する。清時の条の応永十五年（一四〇八）の「太守元久公、清時の忠節を賞して、再び屋久、恵良部（旧領なり。何れの代に公領と為れるか不詳）及び誓書を賜ふ」、あるいは時長の条の応永三十四年（一四二七）の「太守忠国公、恵良部島を時長に賜ふ」、時氏の条の文正・応仁年間（一四六六―六九）の「三島（種子島、屋久、恵良部）始めて法華に帰す」―このように、種子島から屋久島を経て口永良部島までは日常交通の範囲内という意識が窺える。【土佐日記】などを想起してみても、動力船登場以前の航海は、〈風待ち波待ち浦伝い島伝い〉で目的地を目指すものであったはずだ。近代的な地図を見て、竹島・硫黄島も黒島も薩摩半島から同程度の距離にあるゆえに交通の難易度も同程度であるなどと考えるのが、近代人の思考による、まさに机上の空論である。

豎山初「口永良部島に生きて」によれば、昭和の初期頃、口永良部島までは「月にたった一度、種子島・屋久島を経て、定期船が来てくれました」とある。今でこそ屋久島へは飛行機もフェリーも高速船もそれぞれ直行便があるのだが、林美美子の『屋久島紀行』（初出「主婦之友」一九五〇）でさえ、鹿児島から屋久島への直行ではなく種子島経由の照国丸で屋久島を訪れているのである。このように口永良部島は、前近代においては間違いなく種子島・屋久島経由で行く島であった（現在でも屋久島からのフェリー太陽で行く）。その口永良部島から、竹島・硫黄島は目の前に見えるのである（図1）。我々はずい、薩摩半島から竹島・硫黄島・黒島に行くルート

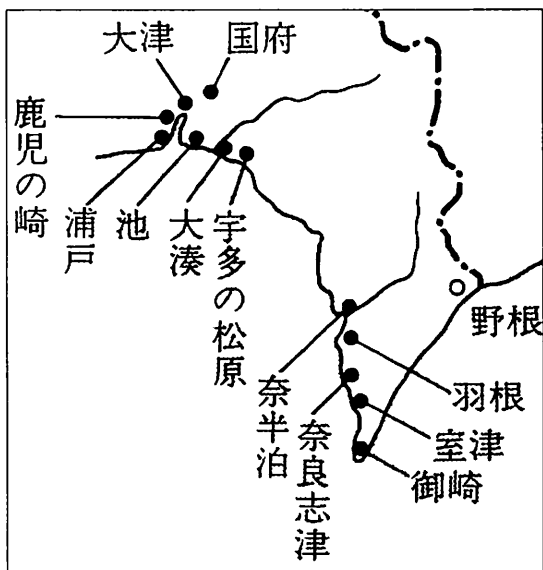


図5

新日本古典文学大系（岩波書店）巻末の「土佐日記旅程地図」をトリミングして部分的に引用した。

を想定しがちだが、風や波を無視して直行便を想定しようとする感覚がそもそもずれているようだ。〈風待ち波待ち浦伝い島伝い〉の感覚は、【土佐日記】がよく伝えている（図5）。これによると、土佐国府を出た紀貫之は、隣の太宰府で一泊、鹿兒の崎を経由して浦戸で一泊、池を経由して大湊では一泊もしていい。ただし、つねに難渋するというわけではなく、風の条件に恵まれば一日で大湊から宇多の松原を経由して奈半泊まで進むような日もあった。しかし、この旅程中これほど進んだのはその区間だけ

で、これ以降、奈半泊で二泊、室津で六泊、いったん出帆したものの再び室津に戻って四泊している。風がなければ出帆できないし、思い通りの風向でなければ目的地に辿り着けないのである。

『屋久町誌』『漁業』には、「薩摩半島の）川辺地方の漁船は、北東の風ともなると帰港することに、大変な困難を生じ、（屋久島の）粟生へ寄港することとなり」と説明しているし、『上屋久町郷土誌』『漁業』にも、「風向きによって漁場を求めていた」とある。魚群が存在するからそこへ漁に出かけるのではなく、「風向き」という条件が加わらなければそこへ行けないのである。

言わずもがなのことを述べたが、「端五島」に宇治群島・草垣群島を入れるなど近年の辺境論にはあまりにも当時のそして現地の実情が踏まえられていない論が多い。ゆえに、あえて述べさせていだいた。加えていうならば、豎山初「口永良部島に生きて」は、口永良部島は近代まで「治外法権的な行政であった」と述べている。三島村では、現在でも硫黄島に一人だけ鹿児島警の巡査が駐在している。竹島にも黒島にもいないのである。舟で行くとは、管理するとは、収税するとは——そういう実態への想像力は、もつと必要なのではないだろうか。

さて、〈風待ち波待ち浦伝い島伝い〉を踏まえて、九州の南に浮かぶ島々を眺めてみる。薩摩半島南端の長崎鼻から硫黄島（北部の坂本港）への直線距離は約四五キロメートルである。竹島へは約四〇キロメートル。一方、口永良部島（北部の西之湯港）から硫黄島（南部の長浜港）への直線距離は約三三キロメートル。薩摩半島

からのこの四五キロメートル（あるいは四〇キロメートル）と、口永良部島からの三三キロメートルの一二キロメートル（あるいは七キロメートル）の差を、どう見るかである。これを大差ないとみるのは、天気予報が発達し動力船に慣らされた近代人の認識だろう。現在のフェリーみしまでさえ、薩摩半島南端の山川沖から竹島まで一時間半ほどかかる。風を頼りにした当時の舟の速度を現在の動力船よりもかりに五倍程度遅かったとすると（この想定でも甘いと思うが）、七時間半（硫黄島までだと九時間以上）もかかることになり、ほとんど日中の時間すべてを使って辿り着く計算になる。これが口永良部島からだとして、一、二時間短縮できることになる。しかも天候の急変には、デン島（三ノ迫）の存在も頼もしい（後述）。数字で見ると、当時の航海を想定した難易度で考えると、その差は歴然としているようにみえる。

さてここで、もう一度、『七島問答』を見直す。そこには、次のように、竹島・硫黄島と黒島との区分意識がみられる。「今十島ヲ言ハズ何ゾ七島ヲ云フカ」の問いに対して、

此回ノ事専ラ七島ニアリ。然レトモ黒島ノ如キ此ノ便路ニ於テ見ルヲ得タリ。故ニ卷末ニ言フモノアリ。

と答えている。この報告書（県職員による県知事への）は「七島」（トカラ列島）の实地調査が主眼なので竹島・硫黄島・黒島の三島を含む「十島」全体について述べるものではないと断りつつも、黒島を経由して「七島」に行つたので黒島については巻末で触れる、としている。

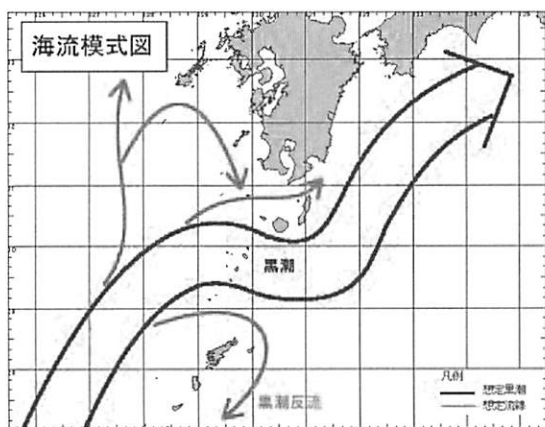


図6

出典：<http://www1.kaiho.mlit.go.jp/KAN10/kaiki/current/index.html>
(第十管区海上保安部のHPより)

ここで三たび海流図を傍証とする。海流図の中には、対馬方面へと北上する黒潮の分流が、長崎県の五島あたりから回って南下する動きを描いているものもある(図6・図7)。この潮に乗れば、坊津あたりから黒島へは比較的行きやすかったのではないかと考えられる。先に引用した建武頃の島津氏が千竈氏に黒島だけを単独で与えるという意識も、また『七島問答』の役人が黒島を経由して(種子島・屋久島経由ではなく)トカラ列島に行ったのも、おそらく坊津を起点とした航路を背景としたものだろう。少々細部に立ち入るが、黒島からトカラ列島の口之島に渡る場合、おそらく北東の風を



図7

出典：<http://www.iokikai.or.jp/kodai.sosyuu.html>

受けて南へ漕ぎ出し、東流する黒潮に押し戻され(時計の文字盤で11時↓10時↓9時↓8時↓7時の)西側に突き出た弧を描くようにして(口永良部島にいったん立ち寄るか、あるいは)直接口之島に辿り着く、そういう航路だったのだろう。たとえば屋久島南西部の粟生港を出帆したとして、もっとも東流の勢いの激しい海峡を、その流れに逆らって口之島に辿り着くのは困難だったはずである。トカラ列島への飛び石としての利用を考えた場合は、種子島・屋久島からの経路よりも黒島から南下する経路のほうが有効であったに違いない。

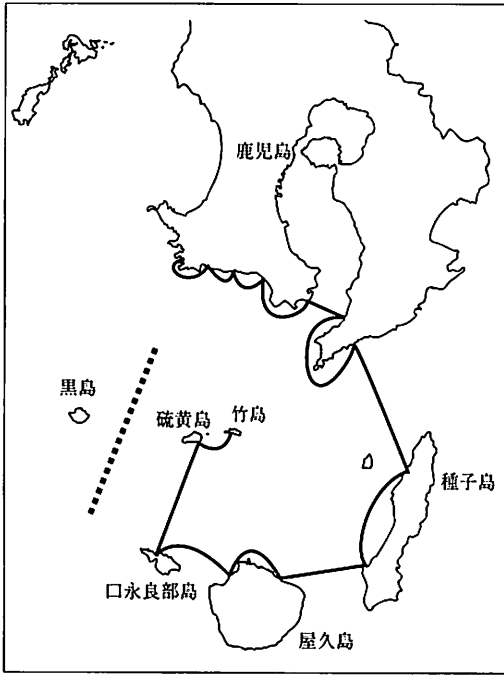


図8

【七島問答】には、さらに注目すべき記述がある。「硫黄島・竹島ニ行カザルカ」の問いに対して、
 「二島最モ上国ニ近く、官人ノ往来少シトセズ。故ニ今二島ニ及ボサズ。
 と答えているのである。薩摩半島に視座を置いた我々現代人の感覚だと、竹島も硫黄島も黒島も薩摩半島南岸からほぼ等距離にみえる。しかし先の引用文では、硫黄島・竹島は「上国に近」と述べている。これは、硫黄島・竹島には種子島・屋久島經由で行くのが一般的であると述べているに等しい(図8)。その感覚だと、黒島

はやはり遠いのである。

六 延慶本『平家物語』にみえる種子島經由の旅程

—「薩摩湯」硫黄島の表現の陥穽—

これまで我々現代人の感覚を誤らせてきた要因の一つに、とくに硫黄島が「薩摩湯(方) 硫黄島」「薩摩湯(方) 沖の小島」と呼ばれてきたという事実があるだろう。大隅湯(方) などという表現はまったくみられないのだ。

延慶本『平家物語』では、次のようにことごとく硫黄島の帰属を薩摩国と表現している。

- 1 丹波少将…(中略)…俊寛僧都、平判官康頼を薩摩国鬼界島へ遣シケルニ(第一末、68才)
- 2 康頼泣々薩摩国へゾ趣ケル(同右、68ウ)
- 3 漸日数経ニケレバ、薩摩国ニモ着ニケリ(同右、73ウ)
- 4 薩摩湯ヨリ遥々ト海ヲ渡テ行ク道ナレバ(同右、74ウ)
- 5 薩摩方へ被流候テ後、彼ノ島ニテコソハカナクナラセ給ヌト計(第二本、43才)
- 6 皆薩摩国油黄島トカヤへ流サルベシト聞バ(同右、52ウ)
- 7 只一人都ヲ出テ、遥々トマダシラヌ薩摩方へゾ下リケル(同右、53才)
- 8 松ハ薩摩方、野中ニアリ。(同右、54ウ)
- 9 薩摩ノ地ニテ、アヤシキ文ヤ持タルトサガス(同右、58才)

10 薩摩濁マデハルバルト思遣リマヒラセ候（同右、59才）

このうち、実際に薩摩国を經由して硫黄島に辿り着くという交通路を想起させる文脈は2、3、4、7、9である。一方、硫黄島が薩摩国に帰属するものであることを示している文脈は、1、5、6、8、10である。種子島・屋久島の管轄が十二世紀後半に大隅国から薩摩国へと変更されたことと硫黄島などの帰属も連動しているのだから、そのことが、延慶本『平家物語』の表現にも反映しているとみてよい。康頼が、

薩摩ガタ 沖の小島に 我有りと 親には告げよ 八重の潮風と詠んで帰洛後、『千載集』に入首したのも、硫黄島の帰属が薩摩国と認識されていたことを窺わせる（史料的には、延慶本『平家物語』よりも『千載集』（一一八八年成立）のほうが古い）。

さて、薩摩ガタのガタは、『平家物語』諸本中もつとも古い表記を保存していると考えられる延慶本において、「方」が三例、「潟」が二例である。柳葉敏昭（二〇〇三）は、「潟」を本来的な表記と考えてラグーンのような地形を指すのではないかとの説を紹介しつつも、それを否定した。たしかに、ここにそのような港湾の形状を表す下接語がくるのは、どう考えても不自然だろう。先に挙げた延慶本の表現のうち、出港地を表すものとして読めるガタは「薩摩瀉ヨリ遙々ト海ヲ渡テ行ク道ナレバ」のみである。『旧記雑録』前編一一三五「嘉祿三年（一一二七）十月十日付將軍頼経安堵下文」に「島津庄内薩摩方地頭守護職」の用例があることから、薩摩ガタは「方」が本来で、管轄を表すものであることがわかる。種子島・

屋久島の管轄が平安後期に大隅国から薩摩国に変更されたとすれば、ことさらに管轄を示す語が付随しやすくなるのも頷ける。つまり、「大隅方ではなく」のニュアンスを含んだ「薩摩方」であったろうと考えるのである。

先述のように、肥前から海路で串木野、坊津へと南下するルートが一般的なものであったとすれば、延慶本『平家物語』で俊寛らが薩摩を經由して硫黄島に渡ったのも事実なのだろう。そのことと前節までに述べたことを整合的に考えるならば、目視できる感覚や行政上の管轄意識からすると「端五島」は薩摩沖だが、実際には、坊津↓枕崎↓頼娃↓伊座敷・佐多岬（大隅半島南部）↓西之表（種子島）↓島間（同）↓宮之浦（屋久島）↓一湊（同）↓永田（同）↓西之湯（口永良部島）↓長浜（硫黄島）↓籠（竹島）などと種子島經由で渡ったということなのだろう（図8）。地理上の距離感や利便性だけでなく、これらの島々における肥後氏（種子島氏の祖）の存在が大きかったと考えられる。

* * *

じつは、延慶本『平家物語』に、種子島經由で硫黄島に渡ったらしき海路の存在を窺わせる表現が二例ある。一例目は、三人が流罪にされる往路での記述である。

端五島ノ中ニ流黄ノ出ル島々ヲバ、油黄ノ島ト名付タリ。サテ順風有ケレバ彼島へ押付テ、端五島ガ内、少将ヲバ三ノ迫ノ北

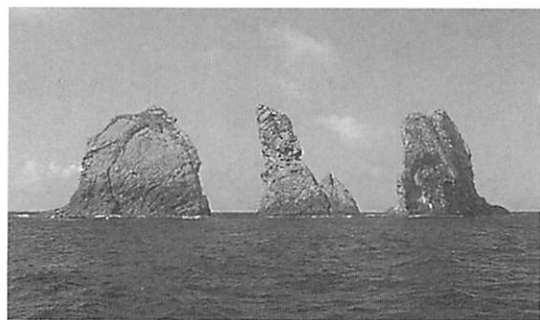


図9

出典：<http://www.bea.hi-ho.ne.jp/iwashi-d/071012minamikyusyu.html>

ノ油黄島：(中略)：ニゾ捨置ケル。(第一末、74才)
 まずは「三ノ迫」とは何かが問題となる。硫黄島の南に「三ノ迫」という表現にふさわしい場所がある。デン島デン島である(図9)。写真のように、海中から岩が三つ突き出している。

この画像は南側(口永良部島側)から撮影したもので、左から順に西の瀬、エボシ、東の瀬の名がある。この一帯の浅瀬は海水温が高く、湯瀬ゆぜと呼ばれている。当然、プランクトンが多く、魚も豊富な場所である。現在では有名なダイビング・スポットで、インターネット上で魚の群れの画像が多く紹介されている。延慶本『平家物語』では、次のように

「迫」の字は岩と岩が近接している場合に用いられているようである。

僧都ハ余リニ悲ニ疲レテ、岩ノ迫ニ沈居タリ。(第一末、75ウ)

応永書写本のルビで「三ノ迫」の「迫」にはセマリとあり、「岩ノ迫」の「迫」にはルビが付されていない(勉強出版本では後者に「はざま」とルビを振るが、それは

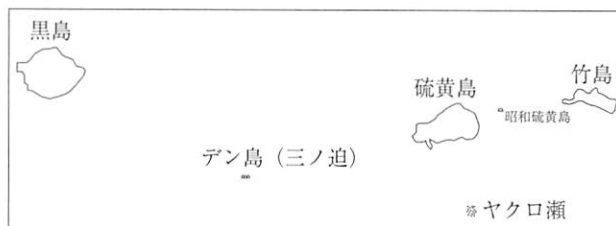


図10

『源平盛衰記』のルビを参考にして校注者が付したもので、これもセマリであった可能性がある)。つまり、デン島は「三ノ迫」の表現に、じつによく符合するものである。ただし、地図でみるとわかるように、デン島から見ると硫黄島は「北」というより「東北東」である(図10)。

位置関係でいえば硫黄島の真南にヤクロ瀬という岩礁地帯があり、そのほうが符合する。ヤクロ瀬付近も海水温が高く、魚の宝庫である(海水温の分布図はhttp://eg-nagasaki.blog.ocn.ne.jp/blog/2012/01/post_c722.html参照)。岩の形状としてはデン島のほうが近く、硫黄島との位置関係ではヤクロ瀬のほうが近いというわけで、両者を混同したものと考えられなくもない。しかし、そうではあるまい。ヤクロ瀬は写真のように多くの低い岩礁が突出している海域(図11・図12)で、当時の船を想像してみた場合、船が岩礁に当たって難破しそうな危険な場所である。天候が急変して視界不良となれば、どこに岩礁があるのか見分けられない。つまり、近寄りたくない海域だろう。逆にデン島は、遠くからでも目印になるような島で、風や波が思いどおりにならない時には岩陰に船を避難させられるような、頼り

になる小島である。このように具体的にイメージした場合、口永良部島を出た船はヤク口瀬に近づかないようにデン島を目指して北上し、ヤク口瀬とデン島との間を通って硫黄島に向かったのだろう（先述のように、このあたりは西から東への強い潮が流れているので、ヤク口瀬の東側を通ることは考えにくい）。口永良部島を出た船が、デン島（三ノ迫）を左に見ながら北上し硫黄島に向かった、そのことを「三ノ迫ノ北ノ油黄島」と表現したのである。

少し隘路に入りすぎた。本題に戻る。ここで重要なのは、「三ノ迫ノ北」の「北」である。これは、硫黄島への行程を、南の口永良部島から説明しているということではないか。方角というものは、「どこから見て」という視座があつてこそ表現されるものである。つまり、種子島経由の航路を背景にしなければ出てこない表現だと考えられるのだ。逆のことを想定してみると、たとえば枕崎方面か



図11

出典：<http://ishidaisyunjyu.blog47.fc2.com/blog-date-201204.html>



図12

出典：<http://www1.bbiq.jp/gyoshu/newpage8.html>

ら硫黄島を目指す時に、はたして何かの目印の「北」に硫黄島が存在するなど言うだろうか。枕崎方面から南に見える硫黄島の、さらにその向こう（南）の目印（デン島）を想定して、その「北」などと表現することは、まずありえないと断じてよい。ちなみに、硫黄島の北側の海域には、「三ノ迫」らしき岩礁や小島はいつさい存在しない。

種子島経由の航路の存在を窺わせる二例目は、康頼と成経が硫黄島を離れる復路の記述である。

少将ハ九月半スギテ島ヲ漕出テ、風ヲシノギ波ヲワケ、浦伝島伝シテ、廿三日ト云ニハ九国ノ地ヘ付ニケリ。

二重傍線部のように、「浦伝島伝シテ」とあるのは、枕崎方面からの航路では考えられない。そこは大海原が広がるばかりである。「浦伝島伝」の表現は、硫黄島↓口永良部島↓屋久島↓種子島↓大隅半島のルートにまさしく符合する。しかも、この場合、珍しく薩摩とは表現せずに「九国ノ地」と臆化している。これは、康頼・成経の本土上陸地が大隅国であったための表現ではないか。そして、傍線部のように、「九月半スギテ」硫黄島を出発し、「廿三日」に九州本土に着いたとするのだから、約一週間かかっていることとなる。もし硫黄島から直接枕崎・坊津方面を目指したとするなら、危険な海上に一週間も浮かんでいたことになり、不自然である。当時その航路がまったく使われていなかったとはいえないが、もしそのルートを使うとすれば、よほど風と波に恵まれて、一日で渡れるような見込みがある日を選んで渡るはずである。日程と言い、描写と言い、

延慶本の記述は、種子島經由のルートでしか説明できないのである。

このように、延慶本「平家物語」に語られている成経らの往復ルートは、いずれも種子島經由のそれらしいのである。¹²⁾

七 康頼や俊寛の最初の流刑地

一般には成経・康頼・俊寛の三人が初めから揃って硫黄島に流されたと考えられているが、それは記事を整理する傾向の強い覚一本や流布本系統の「平家物語」によって形成された認識である。「平家物語」の研究者の間では、延慶本がよく古態を存し、夾雑で煩瑣にみえるディテイルを保存したテクストであることはよく知られている。また、延慶本では、最初は成経・康頼・俊寛の三人がそれぞれ別の島に流され、のちに硫黄島に合流したと書かれていることも、研究者の間では常識である。ただ不幸にして、延慶本は一般の読者の目に触れにくいいため、そのことが現地三島村の方々にもほとんど知られていない。延慶本によると、次のように記されている。

端五島方内、少将ヲバ三ノ迫ノ北ノ油黄島、康頼ヲバアコシキノ島、俊寛ヲバ白石ノ島ニゾ捨置ケル。彼島ニハ白路多くシテ石白シ。水ノ流ニ至マデ、浪白シテ潔シ。カ、レバニヤ、白石ノ島ト名付タリ。賁テ一島ニ捨置タラバ、ナグサム方モ有ベキニ、ハルカナル離レ島共ニ捨置ケレバ、悲ナムドハ愚也。サレドモ、後ニハ俊寛モ康頼モトカクシテ、少将ノ有ケル油黄島へ

タドリ付テ、互ニ血ノ涙ヲ流ケリ。

一読して、通常の流罪でないことがわかる。通常の流罪とは、都から領送使たる檢非違使庁の役人が流人を連行し、配流地の官人に引き継ぎをするもので、流人は配流先でも役人に管理され続けるものである。「保元物語」の崇徳院がその好例だろう。ところが右のように成経・康頼・俊寛の場合は、「捨置ケル」「捨置タラバ」「捨置ケレバ」とぶれることなく「捨置」が用いられている。いわゆる「捨て殺し」と呼ばれる形態の流罪である。「端五島」の郡衙的な機能を果たした島は間違いなく種子島だろうから、屋久島を経てさらに奥地に流罪にした彼らを管理するための人員を配置することはできなかったのだらうと察せられる。この流罪が「捨て殺し」であることのもう一つの根拠は、俊寛や康頼が「後ニハ」「トカクシテ」硫黄島に「タドリ付」いたと記していることである。商人の船や漁船に便乗させてもらったのだらう。つまり、勝手に移動したらしいのである。役人に管理されている正式の流罪でないことを如実に物語っている。

さてここで問題となるのは、成経が流罪になったのは硫黄島で問題ないとして、康頼が流された「アコシキノ島」や俊寛が流された「白石ノ島」がどこなのか、である。

『三島村誌』は「アコシキ」が転訛してアクセキになったと考えたのか、康頼が流されたのは悪石島（トカラ列島）と断じている。そして、「白石ノ島」については、伊地知季安『南聘紀考』の宮古島説を退け、「三島、十島中で、海岸の石が砂浜が白く、白鷺が飛

んでいるのは竹島か宝島である」と候補を挙げ、竹島は硫黄島に「余り近すぎる」として、宝島説を提唱している。硫黄島に成経、そこから離れたトカラ列島の悪石島に康頼を、宝島に俊寛を、と考えているわけだが、延慶本の記述を知らないで推定したものである。上述のとおり延慶本では「端五島ノ内」とあるので、トカラ列島は候補にならない。逆に、利便性の高い種子島・屋久島でもなさそうである。そう考えると、口永良部島・硫黄島・竹島に三人を流したことになる、硫黄島は成経だと明記しているので、口永良部島と竹島とで考察を詰めることになる。「三島村誌」のいうように、竹島は石や砂浜の白さが目立つ島である。フェリーみしまの着く長瀬港の周辺には地層が剥き出しになった断崖が多くみられるが、いずれもかなり白っぽい。地山は玄武岩―苦鉄質安山岩の薄い溶岩と火砕岩が累積した山、および流紋岩―デイサイトの厚い溶岩流で形成された山だが、その上に小アピ山火砕流、籠港降下火砕物層、長瀬火砕流、船倉火砕流、竹島火砕流などが堆積している（『三島村誌』）。竹島には由緒不明の聖大明神社があるが、古代・中世においては聖とは僧侶を意味する言葉であったことを想起すれば、そこが俊寛居住の痕跡を伝える場所であるかもしれないと考えている。ともあれ、「白石ノ島」が竹島でありそこに流されたのが俊寛だとすると、消去法で、口永良部島に流されたのは康頼だということになる^①。

この推定は、別の観点から補強することができる。歴史の結果として俊寛ひとり硫黄島に残されたことからすると、三人の中で

もつとも罪が重いと考えられたのは俊寛であった。すると、種子島を起点として屋久島、口永良部島と奥へ入ってゆく航路の中で竹島がもつとも僻遠の島ということになる。また、康頼は小松殿重盛との関係が近く（延慶本第一末、68オ）、「撰津国狗林^{こまのほし}」で出家して信心深さも見せているので、種子島・屋久島にもつとも近い口永良部島に康頼が流されたと考えるのが穏当だろう。つまり、近い方から順に康頼、成経、俊寛と置かれたのだろう。

八 おわりに

小稿で明らかにしたことは、大きく言えば次の二点である。

① 古代（十五世紀まで）においては、屋久島・口永良部島の南、硫黄島の西に国境の意識があった。

② 船の自由な往来はあっただろうが、駅路・水路のような制度的な交通路は、大隅―種子島―口永良部島―硫黄島―竹島のルートであった。

永山（一九九三）は、南島への流罪に関する史料が歴史上から消える三世紀半におよぶ期間と、公的に死刑が廃止されていた期間（弘仁―保元）が重なることを発見した。小稿で薩摩硫黄島の境界性が明らかになったように、彼らが流罪にされたのがなぜ口永良部島・硫黄島・竹島であったのかの謎は、この三島が最辺境の島であったことに尽きるだろう。この三島よりも外側（黒島やトカラ列島）は日本国の管理区域外なので、〈管理内における最辺境〉とい

う意味合いでこの三島が選ばれたのだということがわかる。言い方を変えれば、「死罪の一步手前」という意味合いが、最辺境の三島には込められていたということだ。鹿谷陰謀事件に怒り狂った平清盛は、配流地を「硫黄島」と固有名詞をもって指定したのではなく、おそらく（日本のさいはてへ流せ）と命じたのではないだろうか。京から見れば対馬も薩摩も大差ない辺境だろうが、大宰府の視座で見れば薩摩沖の島々を選ぶだろうし、薩摩国司の視座で見れば種子島・屋久島のさらに先にある三つの島を選ぶだろう。

小稿で探ってきた方法（海流、現地の交通事情、現地人の地理感覚の勘案）に異論があるかもしれない。中央が認識した境界認識と現地人（薩摩・大隅）が認識した境界認識はズレるのではないかと。そもそも、このような辺境の地では、「中央の直接支配」というものは観念的なもの（幻想）だろう。中央が辺境まで直接統治するというよりも、かりに大宰府まで統治したらその大宰府が薩摩半島や大隅半島南部までの統治を考え、あるいはかりに薩摩国や大隅国まで統治したら薩摩国や大隅国が南の島々の統治を考える、そういった間接的な統治しか、古代においてはありえないはずだ。薩摩・大隅の人間が目の前のこれこれの島までは我々が支配しているといえ、それを大宰府が追認し、さらには奈良や京の中央政府が二重に追認する、そのような姿が実態だろう。すなわち、南の島々のどこまでが〈内側〉であるかは、薩摩半島・大隅半島の人々がその地域をどう認識したかが重要な鍵となるはずだ。中央か地方かの二者択一でもなく、重層的に考えるべきだということだ。

冒頭で述べたように、交易論が間違っているというのではない。ただ、境界論について述べようとするのならば、中央的な視座と連動しているはずの境界認識といったものがどのように形成されるのか、いま以上に突き詰めて考える必要があるということだ。いまの境界論・辺境論は、実体的な常識としてすでに境界・辺境と呼ばれるところにはじめから着目し（境界が境界であることをすでに自明視し）、その前提の上で交易論を論じているものが大半である。それはそれで有益な面もあろうが、本来の意味で境界を論じようとするならば、重層的ともいえる中央視座形成の問題をながしろにはできないはずである。それこそが、国家意識の形成論に収斂する境界論ではないだろうか。

注

(一) 永山修一(二〇〇七)は、池畑耕一(一九九八)によって報告され、二〇〇三年以降精力的に発掘調査が継続されている喜界島(奄美大島の東)の城久遺跡群から、大宰府との緊密な交流が窺えることを根拠に、喜界島に「大宰府の最先機関的なもの」が設定され、「南島産物を周りの島々から集め政府に貢進するなどの任務にあたった」と推定している。これ以前に永山は(一九九三)において、「日本紀略」長徳四年(九九八)九月十四日条の「貫駕島」を、大宰府からの「下知」を受けて「南蛮」を捕進するような位置にあるものと指摘し、「貫駕島」が日本国の制度の内側に組み込まれた島であると考えた。それがベースにあつて、城久遺跡の出土品と結び付けられている。そして永山は(二〇〇八)で、「二〇世紀末の段階で、キカイガシマに大宰府の最先機関が置かれていた可能性が高く」「二世紀になると、キカ

イガシマは異国としての位置付けに」なつたと通時的な問題として考
えている。出先機関とまで言ってしまうことに、危うさはないだろう
か。

(2) 『日本書紀』にトカラ国、トカラ人と読める表記が出てくる。次の
五例である。白雉五年(六五四)四月「吐火羅国」、斉明天皇三年
(六五七)七月三日「親貨邏国」、同七月十五日「親貨邏人」、斉明天
皇五年(六五九)「吐火羅人」、斉明天皇六年(六六〇)七月十六日「都
毗羅人」。これらの多くはインドの舍衛国や舍衛人とともに出てくる
ので、タイ国のドヴァーラヴァティを指すと考えるのが現在では定説
となつている(井上光貞(一九六〇)、中村明蔵(一九九五))。現在
のトカラ列島に、古代において異国を表した語が援用されていること
は、トカラ列島に対する本土側の認識を表わすものとして象徴的だろ
う。

(3) 十島村の名は、明治四十一年の村制施行によるもので、当時の「十
島」とは現在の三島村(黒島、竹島、硫黄島)を含むものであつた。
つまり、三島と七島を合わせて「十島」としたわけである。昭和
二十七年に三島村と十島村(この場合の「十島」は旧来の七島のこと)
とに分かれて日本国に返還され、鹿児島郡に属した。新しい十島は、
口之島、中之島、臥蛇島、平島、諏訪之瀬島、悪石島、宝島、小臥蛇
島、小宝島、上ノ根島、横当島である。このうちの傍線部が、旧「七
島」である。近世には川辺郡に属したため、「川辺七島」と呼ぶこと
が多かつた。古来の端五島と奥七島を合わせると十二島となるわけ
で、実際に「十二島地頭職」という職も、中世には存在した(『旧記
雑録』前編一―三五一「嘉祿三年(一一二七)十月十日付將軍頼經安
堵下文」など)。トカラ列島まで含めて日本国の内側とみる史料の初
見である。おそらく、頼朝によるキカイガシマ征伐後に、組み込まれ
たものと考ええる。それ以前は、硫黄島が最辺境であつたのだろうし、
その後も、小稿で詳述するように口永良部島・硫黄島とトカラ列島と
の間には緩やかな断絶感が存在し続けたと考ええる。

(4) 黒島流れは明治二十八年七月二十四日の海難事故。枕崎の漁船が

黒島付近で操業中、台風の接近に遭い、四―一名が亡くなつた。その
多くは、黒島片泊の塩手鼻・ユキノ瀬あたりに打ちよせられた。いく
ら台風でも、前触れもなく暴風・高波が訪れたとは考えにくい。徐々
に波風が強くなる中で、港に近づきにくい潮流の難しさが黒島周辺海
域にはあつたと考えるべきだろう。

(5) 南西諸島の生物相で、屋久島・種子島と奄美群島との間(厳密には
悪石島と小宝島との間)に存在する生物地理区の旧北区と東洋区を分
割する分布境界線。渡瀬庄三郎によって大正元年(一九二六)に発表
された。

(6) 『種子島家譜』の十代清時の条に、永享八年(一四三六)八月十日
のこととして、「好久(後に用久と改む)、薩州川辺七島の臥蛇、平、
二島を賜ふ」の記事がみえ、十二代忠時の条に、永正十年(一五二三)
のこととして、「臥蛇島貢物」のことがみえるので、中世においてト
カラ列島がけつして渡ることのできないほどの断絶感があつたとい
えない。しかし、このような記述がその後、継続的に出てくるわけ
でもない。

そもそも延慶本『平家物語』に「島ノ数十二アムナル内」とあるの
で、トカラ列島は古くからその存在が日本国から認知されていたとい
うことだ(奄美・琉球とは異質)。それでいてトカラ列島は日本に從
属していないと言うのだから、境界のグレーゾーンと認識されていた
ことを窺わせる。なお、鳥越皓之(一九八二)は三島村と十島村とを
一体のものとして扱っているが、この認識は中世にまで遡れるもので
はない。

(7) 『種子島家譜』が明治期の記録まで収めていることから、その史料
的価値に疑念をもつ向きもあるかもしれない。増村宏「種子島家譜
解説」(ぶどうの木出版の第六冊)によれば、種子島家に家譜編纂事
業が起こつたのが十八代久時(二六三九―一七三二)からだといふ。
それが基になつて『種子島家譜』が出来上がったわけであるが、その
頃、先祖の事績を記述したものがすでにあつて、逐次的に書き継がれ
てきた先行文書を文字どおり編纂したのであつて、虚構を交えて書き

換えたという質のものではなさそうである。中世の部分においても、『種子島家譜』の記述は信頼してよいだろう。

- (8) 小園公雄(一九九五)の指摘によると、文保二年(一一三二)や元徳三年(一一三三)や延文元年(一一五六)の文書までは「十二島のちとうしき」「十二島のちとうしき」「十二島地頭職」であったものが、貞治二年(一一六三)には「同国河辺郡 同十八島」の表現が突如として出てくる。おそらく前三者の「十二島」は延慶本と同じ「端五島」+「奥七島」で、後者の「十八島」は小園の解釈のとおり六島プラス十二島と考えるのがよいだろう。五島が六島に増えたのは「端五島」に黒島を加えたものだろう。そして、旧来はトカラ列島を「七島」と称していたものが「十二島」になったのではないか。この数日後の条には「薩摩国川辺郡 同拾貳島此外五島」という表現も出てくるが、これは黒島を併合することが難しかったのか、あるいは古い認識が不用意に出てしまったのかだと考えられる。

- (9) 『三島村誌』同章第四節「海賊横行」で永享七年(一一四五)の文書を引用して、その中に「五島七島」を「五島(多祢島)屋久島、永良部島、硫黄島、竹島)七島(口之島、中之島、臥蛇島、平島、諏訪之瀬島、宝島、横当島)坊泊津、それに応永十九年から知行分に入った黒島のうち種子島氏知行として認められた所を除き、闕所たる竹島、硫黄島、黒島、それに七島と坊泊津」と解釈している。黒島まるごとではなく、島の一部が種子島氏、別の一部が新しい領主(伊集院継久)と領有権を分けて考えている。これも穏当な考えだろう。

- (10) 念のため付言しておくが、この一四一二年まで硫黄島と黒島との交流がなかったと言っているのではない。風や波の条件が合えば、日常的に行き来していただろう。繰り返すが、そのような交流・交易と統治・管理(徴税システムの構築など)とは別問題である。

- (11) 永山修一(二〇〇二)は、屋久島・口永良部島の管轄が大隅国から薩摩国に変更されたのを「遅くとも」「二世紀末」とする。成経が、「薩摩方 沖の小島(硫黄島)に 我有りと」の歌を詠んだのは「千載集」成立(一一八八年)以前のことだから、それ以前に硫黄島も薩

摩方に組み入れられていたことになり、永山説と符合する。この移管はおそらく、阿多忠景(持鉢松遺跡の関係者)の活躍と無関係ではないだろう。

- (12) 延慶本『平家物語』のすべての表現が現地の地理と符合すると指摘しているのではない。硫黄島には長さ「一二丁の砂浜など存在しないのに、延慶本ではそれがあるといふ。『白氏文集』や『和漢朗詠集』の表現によつて硫黄島を観念的に描写しているところもある。延慶本における硫黄島周辺の描写は、現地の地理に根差した部分を核としつつも、虚構的な層が後次的に重なって形成された重層的な構造を呈したものだと考えている。そのような表現構造については、別稿で述べらる。

- (13) 『日本書紀』白雉四年(六五三)に出る「竹島」が三島村の竹島であるかどうかの確証はない。三島村の竹島の古名が「白石の島」であった可能性がある。また、口永良部島は「種子島家譜」などでは「恵良部島」だが、この古名が「アコシキの島」であった可能性もある。「アコシキ」の「ア」が脱落するとコシキで、クシキも音が近い。甌島、串木野、串良、岸良、串間など南九州には類似の地名が多い。これらの元は、記紀に出る「奇(く)し」ではないだろうか。神秘的だ、霊妙だ、というような意味だろう。

〔参考文献〕資料

- 『延慶本平家物語 本文編』(勉誠社、一九九〇)。適宜、汲古書院刊の影印本(一九八二―八三)を参照した。また、「嶋」を「島」と改めるなど一部表記を変更した。
- 『上屋久町郷土誌』(上屋久町教育委員会、一九八四)
- 『三国名勝図会』巻之二十八(天保十四年刊、一九七二の青潮社版による)
- 『七島問答』(鹿児島県立図書館蔵)：明治十七年の頃、鹿児島県令渡辺千秋の命に従った白野夏雲(鹿児島県職員)がトカラ列島を実地調査

した際の報告書。

『拾島状況録』(笹森儀助著、昭和十四年、青森県立図書館蔵、鹿児島県立図書館の転写本による)

『生活誌 屋久島に生きて』(上屋久町教育委員会、一九八四) 所収の豎山初(明治四十二年二月生)著「口永良部島に生きて」

『種子島家譜』(ぶどうの木出版、二〇〇三)

『十島村文化財調査報告書 第二集 中之島文書』(十島村教育委員会、一九八〇)

『十島村誌』(十島村教育委員会、一九九五)

『三島村誌』(三島村教育委員会、一九九〇)

『屋久町郷土誌』第二巻村落誌・中(屋久町教育委員会、一九九五)

『屋久町誌』(屋久町教育委員会、一九六四)

〔参考文献〕 研究書・論文

網野善彦(二〇〇〇)『日本とは何か』東京・講談社

池畑耕一(一九九八)『考古資料から見た古代の奄美諸島と南九州』(『列島の考古学』、河出書房新社)

井上光貞(初出一九六〇)『吐火羅・舍衛考』(『井上光貞著作集』、岩波書店、一九八六)

上村孝二(一九五九)『語彙「肥前から薩摩へ」』(九州大学国語国文学会「語文研究」九号)

小園公雄(一九九五)『南北朝時代・室町時代のトカラ―支配の変遷』(『十島村誌』第二編第三章第一節)

利光三津夫(一九八二)『流罪考』(『律令制の研究』、慶応義塾大学法学研究会)

鳥越皓之(一九八二)『トカラ列島社会の研究』東京・御茶の水書房

中村明蔵(一九九五)『古代文獻に見える「吐火羅」』(『十島村誌』第二編第二章第一節)

中村伸一(一九七〇)『トカラ列島・中之島の自然』(十島村立中之島中

学校、私家版、鹿児島県立図書館蔵)

永山修一(一九九三)『キカイガシマ・イオウガシマ考』(『日本律令制論集』下巻、吉川弘文館)

永山修一(二〇〇二)『キカイガシマの古代・中世』(『東北学』六号)

永山修一(二〇〇二)『南九州の古代交通』(『古代交通研究』一二号)

永山修一(二〇〇七)『文獻から見るキカイガシマと城久遺跡群』(『東アジアの古代文化』一三〇号)

永山修一(二〇〇八)『古代・中世のキカイガシマと喜界島』(『沖縄研究ノート』一七号)

野口実(一九九五)『薩摩と肥前』(『鹿児島中世史研究会報』五〇号)

野口実(二〇〇二)『列島ネットワークの中の平泉』(入間田宣夫・本澤慎輔編『平泉の世界』高志書院)

村井章介(一九九七)『中世国家の境界と琉球・蝦夷』(『境界の日本史』、山川出版社)

元木泰雄(一九八三)『撰関家における私的制裁について―十一・二世紀を中心に―』(『日本史研究』二五五号)

山田尚一(一九九五)『近世の吐噶喇列島』(『十島村誌』)

柳原敏昭(二〇〇三)『平安末―鎌倉期の万之瀬川下流地域―研究の成果と課題』(『古代文化』五五巻二号)

柳原敏昭(二〇〇五)『中世万之瀬川下流地域の様相について』(羽下徳彦編『中世の地域と宗教』吉川弘文館)